

「シャッター・ラブ」

松村 有紀子

○スタジオ

白い空間。カメラを構える男。
中央にバスローブを羽織った女性の
後ろ姿。女性の顔は見えない。
カメラのファインダー越しに、女性、
ゆっくりと、バスローブを脱ぎ始める。
男の声「あ……」

バスローブが女性の肩をゆっくりと
滑り落ちていく。

突如、新人アイドルグループの歌のイ
ントロが始まる。

○ 時男のアパート・外観（朝）

季節は、初秋。青空に、うろこ雲。

タイトル『SHUTTER♥LOVE』

築30年以上の古い木造アパート。

太陽はすでに高く上っている。

曲、イントロから、歌へ。

○ 同・時男の部屋（朝）

1DKの、古いが清潔感のある部屋。

床に落ちたスマホから、新人アイドルグ
ループの歌のイントロが流れている。

ベッドで眠り続ける、星野時男（19）。

スタッフ・キャスト・クレジット

ベッド側の壁の一面は、メガネを掛け
た大人しそうな女性、結城泉（20）
の写真で埋め尽くされている。

ポर्टレイト写真と、演劇の舞台公演
写真がある。

もう一面の壁は、新人アイドル

及川夕希（18）の撮影会で撮った
写真で、埋め尽くされている。

水着やコスプレなど、キュートと
セクシーが同居している印象。

部屋の傍らには、カメラの保存ケース
や撮影機材などが見える。

一見して、カメラ・アイドルオタク写
真学生の部屋と分かる。

アイドルグループの音楽、サビへ。
ハッとして目覚める、時男。

時男「……夢か」

時男、まだ眠そうな目をこすりつつ、
メガネとスマホを探り当て、アラームに
設定された、新人アイドルグループの
曲を止める。

○二子玉川美術大学・外観

モダンでスタイリッシュな校舎が立ち
並ぶ、緑の多い構内。

T【三日前】

○同・演劇サークルの部室・前

「劇団 ラブ&ピース」と筆文字で
書かれた木の看板が掛かっている。

○同・演劇サークルの部室

時男を含む十数名の部員たちがテーブ
ルを囲んで、各自ホチキスで綴じられた、
脚本のプリント冊子を読んでいる。

メガネの時男、黒白のボーダーのシャツ
に、コンデジカメラを首から下げている。

時男の向かい側には、時男の部屋の壁
を埋め尽くしていた写真のモデル、
結城、メガネを掛け、脚本に目を通し
ている。

結城の前にはノートパソコンが開いて
置いてあり、書記を務めている様子。
全体的に、美大特有のおしゃれで個性
的な雰囲気漂う。

時男と結城、おしゃれとは縁遠い服装
で、なんとなく浮いている。

脚本の表紙には、「劇団 ラブ&ピース
『ラブホテル家族』最終稿

五十嵐光太」と印字されている。

部室の奥のホワイトボードには、

「9月〇日 部会 芸術祭演目『ラブ
ホテル家族』」と書かれている。

ボードの前に立ち進行役を務めるのは、

部長、五十嵐光太（21）。スタイリッシュでスマートな印象の好青年である。光太「えー、はい、みんなそろそろいいかな」

部員たち、脚本を閉じ光太の方を向く。

光太「えー、今回は、見ての通り、俺のオリ

ジナル・ポエティック・エロティック・

コメディ、略して、ポエロティック・コメデ

ィです。とりあえず、反対意見とか、主演

女優やりたいとか、何かある人！」

光太、自分の左手をあげて、見回す。

ベレー帽を被った、ファッショナブルな

印象の林菜々（22）、待ってましたと

ばかり、手を挙げる。

マゼンタ色の表紙のスケッチブックを

抱えている。

菜々「ハイハイハイハイハイハイハイ！」

光太「ハイは一回でよろしい、じゃあ姐さん」

菜々「光太パイセンたら、姐さん言わんとい

て！」

菜々、手元のスケッチブックの、付箋が

貼ってあるページを開く。

光太「ひょっとして、それは？」

菜々「そう。実は初稿読んだ瞬間、すぐに閃

いたの、今回の宣伝ポスターのデザイン！」

光太「はやっ」

菜々「まあ見てよ」

立ち上がり、スケッチブックを、机の上

に広げる菜々。覗き込む部員たち。

ちよっと引き気味の反応を見せる、

時男。

少し覗き込んでから、ノートパソコンの

キーボードを叩く、結城。

後ろ姿の裸の女性と、こちらを向いて

いる裸の男性が配置された、

アイディアスケッチ。

二人はそれぞれに、カサブランカの花を

持っている。

光太「振り切ったねえ」

男子部員1「エロッ！」

光太「それを言うなら、ポエロだろ」

菜々「違う！これは、アート！…とはいえ、
エロを利用しない手はないと思うわけ！

（ホワイトボードを指差して）タイトルが
タイトルだけに！」

光太「さすが、姐さん、分かってるねえ」

男子部員1「にしても、エロ過ぎねえ？」

光太「だから、ポエロ」

菜々「ノンノン、やらしくならないようにキ
レイに撮るの。オブリエミたいに、モノク
ロでね。カメラマンは、我らがトッキー！」

時男に向かって、拍手をする菜々。

続けて拍手する、部員たち。

時男、戸惑いの表情を浮かべる。

時男「えっ僕？」

男子部員1「トッキーにエロ、似合わねー」

菜々「エロじゃない！アート！…！」

光太「エロじゃない！ポエロ！…！」

時男「なんで僕？光太先輩だって写真コース
じゃん」

菜々「隠れ細マッチョの光太パイセンには、

モデルの方、お願いします」

光太「え、俺？」

菜々「そ！結果にコミットした成果を見せび
らかすチャンス！…！」

光太、一瞬狼狽えるが、乗り気な様子。

光太「なぜそれを…まいいけど。俺のホンダ
し。トッキー、かっこよく撮ってくれよな、

ポエロ、よろしく」

時男「え、まだ、返事してないんですけど…」

菜々の方を責めるように向く、時男。

菜々「トッキーさあ、アイドル撮りたくて写
真やってるんでしょ？水着とか、ヌードと
か、将来あるかもよ？」

時男「え、まあ、確かに…でも僕、ヌード

なんて撮ったことないし……」

菜々「だからこそよ！こんな機会でもないど、
学生の分際で、ヌードなんて撮れることな
いでしょ？」

時男「…ちょっと考えさせてよ」

男子部員1「いいなトッキー！」

光太「がんばれ草食系！」

腕組みをして考え込む、時男。

菜々「問題は、女の子の方……」

キーボードを叩く手を止める、結城。

結城を含む名程の女子部員たちを

見回す、菜々。

菜々「だくれ・に・し・よ・う・か・なく」

女子部員全員、首を横に振る。

結城の隣にいた太めの女子部員、

顔をしかめて、

女子部員「無理！又ードとか絶対無理！」

時男、女子部員の方を見た瞬間、

結城と目が合う。

結城、咄嗟に目を逸らす。

思わず横を向く、時男。首から下げた

カメラに手をやり、落ち着こうとする。

○ファミレス・店内（夜）

向かい側に座っている結城に手を合わ

せ、又ードモデルになることを懇願して

いる、菜々。

菜々「ね、お願い！」

結城「イヤ。それに、カメラマンってトッキ

ーなんだよね……」

菜々「うん、無理にでも、あいつにやらせる

つもり」

結城「トッキーなら、尚更イヤ」

菜々「そりゃあね、ぜんっぜん恋愛対象じゃ

ない男の前で脱いでもねえ」

結城、人差し指で、しいーのポーズを

して、

結城「そういうことじゃなくて！友達だから

こそ、イヤなの」

菜々「うーん。気持ちは分からないでもない

けど……」

結城「どうしてもトッキーじゃなきゃダメな

の？」

菜々「うん、ダメ」

結城「なんで？」

菜々「トッキーのあの、写真っていうか、い

や、アイドルにかける情熱、私、買ってるんだよね。果てしなくまっすぐっていうか。だって新歓の時、何て言ったか覚えてる?」

○（回想）チェーン店系居酒屋・店内（夜）
演劇サークル新入生歓迎会。

貸切の座敷に、二十数名の演劇部員が座っている。

立って自己紹介する、時男。素朴だが、剥き立てのゆで卵のように初々しい。

この頃から、黒白のボーダーシャツにジーンズが、時男の定番のようである。

時男「星野時男、写真専攻です。群馬県出身です。アイドル大好きなんで、将来はアイドル写真家になります」

半分馬鹿にしたような笑いが起こる。
笑いを無視して続ける時男。

時男「演劇の舞台が撮りたくて、入部しました。将来は、絶対、篠山紀信みたいにビッグになって、アイドルと結婚します!」

拍手する、時男の向かい側の席の菜々。

菜々につられて拍手する部員たち。

菜々の隣の結城、拍手はせずに、オレンジジュースを一口飲む。

○（戻って）ファミレス・店内（夜）

結城、手元の紅茶を一口すすると、メガネが曇る。

結城「トッキーは嫌いじゃないけど……」

菜々「フムフム」

結城「さっきも言ったけど、彼氏ならともかく、（小声になって）友達の男の子の前で脱ぐとか、逆にビミョー」

再び手を合わせて頭を下げる、菜々。

菜々「お願い、結城しかいないの!」

結城「ごめん。だいたいわたし、自分の裸に自信ないし」

菜々「大丈夫だって!（声のトーン、少し高くなる）（この間の温泉合宿の時、結城、すっごくキレイだったから、いつか脱いでモ

らおうと思ってたんだ!」

結城、再び人差し指で、しい!のポーズ。

結城「そんなとこ見てたの?!」

菜々「だって、結城、自分で思ってるよりずっとキレイだよ?」

結城「そんなこと……」

菜々「何のためにわざわざ演劇始めたの?」

新歓の時、自分の壁越えたいって言ったたよね?」

結城「……」

○(回想) チェーン店系居酒屋・店内(夜)

演劇サークル新入生歓迎会続き。

立って自己紹介する、結城。

今より更に垢抜けない印象で、季節に合わない厚ぼったいセーターを着ている。

結城「結城泉、仙台出身です。専攻は、日本美術史です。将来は、海外の子供たちに日本の美術や文化を伝えられるような、学芸員の仕事に就けたら、と思っています。自分の壁を越えるために、高校時代から演劇を続けています」

結城をずっと見ていた光太、手を挙げ

る。

光太「はい、質問。自分の壁って何?」

結城「えっと、すぐに他人と自分の間に壁を作ってしまうというか、人見知りというか……学芸員になるんなら、越えなくちゃいけないと思って、自分の壁」

光太「へー勇氣あるんだね、結城さんだけに」
笑いと拍手が起こる。

○(戻って)ファミレス・店内(夜)

頬を赤らめながら我に帰る、結城の顔を覗き込むように詰め寄る、菜々。

菜々「ね、チャンスじゃない? いっこ、自分の壁、越えられるよ?!」

結城「でも、越えなくていい壁、越える必要

ある?」

菜々「ある! 結城もわたしもトッキーも、すっごく自信つくと思う!」

結城「……」

菜々「(結城の両手を包み込むように握って) ね、一緒にいいもの作ろうよ、結城!」

戸惑いの表情を浮かべる結城。

結城「う、うん…但し、条件があるんだけど」
上目遣いで、菜々を見つめる、結城。

○時男のアパート・外観(夜)

時男の部屋の明かりを確認する、菜々。

○同・時男の部屋・(夜)

時男、ベッドに寄りかかり、新人アイドル発掘雑誌を見ている。

時計は、9時を回ったところ。

突然、ドアを平手で叩く音がする。

菜々の声「トッキー! いる?」

○同・時男の部屋(夜)

ドアを開ける、時男。

時男「なーんだ、姐さんかよ」

菜々「姐さん言うにゃー! にゃお」

靴を乱暴に脱ぎ捨て、部屋にあがる菜々。

菜々「おじゃましまーす!」

時男、菜々のブーツを揃えながら、

時男「酔ってんの?」

菜々「うへへ、ちよつと飲んで来ちゃった。

とりあえずお水ちょうだい、お水」

時男「何かあったの?」

菜々「うん!(満面の笑みで) カメラマン引き受けてくれたら教えてあげる!」

時男「だから、それはまだ考え中って…」

菜々「いいじゃん、こない写真いっばい撮ってんだから」

ベッド側の壁一面を埋め尽くす、結城の写真を、立ったまま眺める菜々。

菜々「っていうか、初めてちゃんと見るけど、

これ、全部、結城だったんだね」

菜々に背を向けて、ペットボトルの水をグラスに注いでいた時男、菜々の言葉に、うっかり水を注ぎすぎて、こぼす。

時男「うわー！」

咄嗟に、シンクに掛かっていたタオルを取り、床にこぼれた水を拭く、時男。

菜々「そういうことか」

菜々、ベッドに四つん這いになり、結城の写真のうちの一枚を、人差し指でなぞる。

埃がのった写真の表面に、菜々の指の跡が付く。

菜々、指に付いた埃を眺めながら、

菜々「トッキー、最近撮ってる？」

時男「撮ってるよ、課題も多いし、アイドルの撮影会もあるし」

菜々「そうじゃなくて、本当に撮りたい写真撮ってんのかって、訊いてんの！一年の頃は周りの女の子たちに一生懸命声かけて撮ってたのに。ここにあるのだって全部、去年の結城でしょ？」

時男、菜々に水のグラスを渡す。菜々、グラスを受け取り、ベッドに腰掛ける。

時男「まあ、ね」

時男、気まずそうにうつむく。

菜々「なんでやめちゃったの？」

時男「周りのみんなは、芸術的なアート写真目指して撮ってるのに、なんか僕だけ動機が不純みたいで……」

菜々「そこがいいんじゃない。トッキーほどピュアでまっすぐな人、見たことないよ」

時男「ピュアじゃないよ……てか、何しに来たんだよ、そんなこと言いに来たのかよ」

菜々、姿勢を正して、

菜々「そうそう、大事なことを忘れてたわ。あのね、モデル、決まったのー！」

時男「それを先に言ってるよ、んで、誰なの？」

菜々「結城にした！」

時男「えっ！」

菜々「説得するのにすっごい時間かかったけど。条件付きで、やっとうんって言わせた」

時男「条件って?」

菜々「撮影していいのは、後ろ姿だけ。モデルが結城だってことは、絶対に、口外禁止以上。ということ、シクヨロ!」

大きく息を吸って菜々に向き直る、時男。

時男「モデルが結城なら、俺、降りるわ」

菜々「なんでよ!あんだ撮ってたじゃん!」

時男「結城だけはないって思ってたんだ、自分の中で」

菜々、なるほど、という表情を浮かべる。

菜々「へー、そっか。そんなに好きなんだ」

時男「…そういうんじゃないって……」

時男、顔を赤らめて下を向く。

菜々「この部屋、結城が見たらどう思うかな」

時男「言うなよ」

菜々「ふふ、どうしよっかな」

時男「言ったら……」

菜々「カメラマンやってくれたら、言わない」

時男「断ったら……?」

首をすくめ、いたずらっぽい笑みを浮かべる、菜々。

菜々「さあ」

時男「はめられた……」

下を向きため息をつく時男に駆け寄り、両手で時男の手を取る菜々。

菜々「ね、一緒にいいモノ作ろうよ」

時男「えー……」

困り果てた表情の、時男。

× × ×

菜々が帰った後、新人アイドル発掘雑誌をめくりながら、貧乏ゆすりが止まらない、時男。

ページには、露出の激しいセクシーな下着姿のアイドル、及川夕希が写っている。

時男、結城の写真の一枚を壁から剥がし、結城の顔の部分だけになるように折って、及川夕希の顔に重ねる。

素朴な笑顔の結城が、突如淫らに映り、妄想をかき消すように雑誌を閉じる、時男。

時男「何やってんだ、俺！」

○同・浴室（夜）

シャワーを浴びる時男。ひよろりと痩せた体に薄い胸。乱暴に髪を洗う。

○同・時男の部屋（夜）

濡れたままの髪で、素早く着替え、リュックを持ち、部屋を出て行く時男。

○焼肉☆NICO・店内（夜）

おしゃれな内装に、芸能人のサインや写真が飾られているコーナーが見える。広告代理店社員などのマスコミ関係者、業界人っぽい客が席を埋めている。蝶ネクタイをしたウェイター、時男、光太、小沢悠介（20）、働いている。客の去ったテーブルの片付けをしていた時男、ワイングラスを落として割ってしまう。

すかさず客席に向かって謝る光太。

光太「失礼いたしました！」

我に返り、客席に向かって謝る、時男。

時男「す、すみません…失礼しました!!」

悠介、ガラスの破片の片付けを手伝う。

悠介「（小声で）何ぼーっとしてんだよ」

時男「ごめん……」

× × ×
新人アイドル及川夕希、事務所の社長と、マネージャーと一緒に来店する。

× × ×
（フラッシュ）時男の部屋の夕希の写真。初々しい顔立ちとアンバランスな、成熟したプロポーションが印象的。

× × ×
光太、悠介「いらっしやいませー！」

時男「い、いらっしやいませー！」

悠介、颯爽と夕希たちのテーブルへ、水とおしぼりを持っていく。

夕希、鼻にかかった舌足らずな声で、

夕希「すいませーん、オーダーしちゃっていいですか？」

悠介「ハイ、喜んで！」

夕希「中生二つに、ウーロン茶、特上カルピと特上タン塩、あと、サッソチュ！」

悠介「中生二つに、ウーロン茶、特上カルピと特上タン塩、サッソチュでございますね、かしこまりました」

悠介、満面の笑みで戻って来る。

時男、心ここに在らずといった表情ですれ違う。

○同・更衣室（早朝）

深夜バイトが終わり、着替えている

時男、光太、悠介の三人。

興奮気味に時男に話しかける、悠介。

悠介「及川夕希、今日も可愛かったな〜口とんがらせてサッソチュ!とか、もうたまらなわ〜」

いつも以上にテンションが低い、時男。

時男「うん、そうだね」

悠介「何ィ?おまえ、俺たちの女神、及川夕希様が久々にご来店したんだぜ、もっと何かないの?」

光太「及川夕希?誰だよ」

悠介「今年の大浜ロングビーチのキャンペーンガールですよ。これから絶対キます!」

光太「へー、全然知らねーけど、おまえらの趣味にしてはまあまああってところだったな、あの子」

悠介「さすが光太先輩、既にチェック済みです」

光太「しっかし、おまえら飽きもせず次から次へと、新人ばっか追いかけてんのな」
悠介「まだ誰のものでもないピュアな感じがたまらないわけですよ〜特に夕希ちゃんは、もう、神ってるっていうか、天使すぎるっ

ていうか!」

光太「童貞のくせに、発言は完全親父だな。おまえらみたいなのを大ニ病っていうんじやねえの?」

悠介「今日は特に辛口ですね…ねえ、トッキーくん」

時男、上の空。

時男「うん?ああ」

光太「っていうか、こいつの頭ん中は今、他のユウキでいっぱいだけ。なあ、トッキー」

悠介「えっ他にもユウキなんて」
「いたっけ?」
初耳なんですけど!」

光太と悠介の視線、時男に向けられる。

視線を避けるように俯いて、素早く

制服のシャツを脱ぐ、時男。

肘をロッカーにぶつけ、うすぐまる。

時男「……痛ッ!」

光太「おまえ、分かりやす過ぎ」

悠介「他のユウキって誰だよ?」

光太、制服のシャツを脱ぎながら、

光太「しかも、裸の。な」

痩せっぽちの時男とは対照的な、

健康的に鍛えられた細マッチョで美し

い上半身が露わになる。

悠介「えーっ、裸?!いやん」

時男「……」

光太の上半身をじっと見つめる時男。

光太「なんだ、見んなよ!」

急いでシャツを羽織る光太。

我に返る時男。

時男「あ…すいません」

悠介「なんかトッキー、今日全体的におかしくない?」

時男「いや、別に……」

シャツにブリーフ姿で、間抜けな感じで立っている、時男。

○商店街（早朝）

バイトの帰り道。

ママチャリを押しながら、シティバイク

の光太と隣合って歩く、時男。

光太「おまえさ、マジでいいの？このままで」

時男「このままって……」

光太「このまま、言われたとおりにカメラマン引き受けて、平気でいられんの？」

時男「別に……」

光太「分かっただよ、おまえが結城のこと好きだってことくらい」

時男「そんなこと…なんで分かるんですか？」

光太「俺も好きだから」

ぎくつとした表情になる時男。

一瞬の間。鼻で笑う光太。

光太「なーんてな」

思わず大きく息を吐き出す時男。

光太「今は何とも思わないけどな。でもさ、

どうなんだろうな。今ただの友達でもさ、裸見ちゃったら」

時男「僕にとっては、単なる被写体なんで…」

言いかけて口ごもる、時男。

光太「それでも今まで通り、友達の関係でいられるのかな」

時男「それは…」

光太「だいたいおまえ、作品の為とは言え、

好きな女の裸だけ、はいそうですかって平

気で撮れるのか？しかも他の、裸の男と一

緒だけ、いいのかよ」

時男「……全然、」

時男、苦しそうに吐露する。

時男「平気じゃないですよ！」

光太「俺は、その後も平然と友達でいられる自信がない。裸ってだけで、撮影中にムラ

ッと来たら、正直どうしようかと思ってる」

時男「僕は……」

光太「おまえはどうしたいんだよ。このまま何もしないんだったら、俺、結城取っちゃうかも知れないぜ？」

唾を飲み込む、時男。

時男「……！！」

光太の声のトーンが少し上がる。

光太「何とか言えよ」

時男「それは……」

時男の表情、とんだ硬くなる。

やっと吐き出すように、

時男「あ、僕、課題やらなきゃ……じゃあー！」

咄嗟にママチャリに跨ろうとする、

時男。

光太、時男の背後から怒鳴る。

光太「おい、逃げんのかよ！俺、マジで結城取っちゃうぜ?!いいのかよ!おい!」

時男、振り返って絞り出すような声で、

時男「…好きでもないのに、なんで!」

光太「言ったじゃん、好きになるかも知れないって」

時男「だったら、好きにすればいいじゃないですか!」

背中で息をしている時男。

余裕の表情の光太。

光太「そうだ、こうじゃないか?今度の芸祭の写真コンペで賞獲った方が、結城に告白する権利を得る。落選したら、潔く身を引く。実力で勝負するなら、文句ないだろ?」

時男「結城をコンペの賞品みたいに。失礼じゃないですか!それに、結城の気持ちは関係ないんですか?!」

光太「素直じゃないな。ま、とにかく、いい写真撮れよ、おつかれ!」

颯爽とシティバイクで走り去る、光太。

見送る、時男。

○時男の部屋(早朝)

カーテンの締まった薄暗い部屋。

玄関のドアを開けて帰って来る時男。

そのまま、ベッドに倒れ込む。

自己嫌悪で思わず大きく息を吐く。

時男「ダメだ……」

床に落ちている、折り目の付いた結城の写真が視界に入る。

時男、弾かれたように起き上がり、部屋を出て行くこととする。

一旦戻って来て、デジタル一眼カメラ

を掴み取り、部屋を出て行く。

○多摩川沿いの土手（早朝）

時男、カメラを肩に提げ、ママチャリを漕ぐ。

川沿いの土手に座り、カメラの液晶モニターで、夏の劇団の舞台公演で撮った、結城の写真を再生する。

朝日が時男を照らす。

時男、東の空にカメラを向け、ふと手を止める。

時男の主観。シヨキング姿の結城、ファインダーにフレームインして来る。

息を切らせながら笑顔を浮かべる、

結城。

時男、シャッターを押す。

カメラから顔を上げる、時男。

時男「結城！」

結城「トッキー、おはよう！」

メガネを掛けていない。

時男「こんな朝早くから、走ってるんだ」

結城「トッキーこそ…あの、聞いたでしょ？」

モデルのこと」

時男「あ、ああ……」

時男、結城から少し視線を逸らす。

結城「自信ないし、すっごく迷ったけど、

やるからにはちゃんときれいに写りたいし、

撮影まで、ちょっと絞ろうと思って」

時男「そっか……」

時男、結城に向き直る。

時男「あのさ、なんで引き受けたの？」

結城「なんでそんなこと訊くの？」

時男「いや、ただ、びっくりしたから」

結城「私らしくない？んー、そうかもね……」

時男「そんなこと……」

結城「私らしいって何だろ？新しいことに挑

戦することもなく、安全な場所で、ひっそり

息をしていること？」

時男「いや、そんなこと言うつもりじゃ……」

結城「私、ずっと越えたかった。私をがんじが

らめにする壁を。きつと一つ越えたら、次も越えられる。今までは、一つも越えないうちから、無理だと思ってた」

時男「壁……」

結城「これは、チャンスなの。来年から教育実習も始まる。図工の先生になりたいくて、この学校に入ったのに、私に足りないのは、技術以上に度胸だってずっと感じてた」

時男「裸にならなくても、先生にはなれるでしょ?」

結城「その前に私は、壁を越えられる人になりたい」

時男「……すごいな、結城は」

結城「すごくない、まだ」

時男「越えるんだ、壁」

結城「うん、越える」

朝日を仰ぎ、伸びをするユウキ。

結城「撮影、よろしくね、じゃあ」

結城、時男に背を向け走り出そうとする。

時男「あ、結城」

結城「(振り返って)何?」

時男「…俺も、がんばるから」

結城と二人だけの時は、自分のことを

「俺」と言う、時男。

結城「うん、私もがんばる。みんなでいいモノ作ろうね」

時男「うん」

結城「よし、スタート!」

結城の背中を写真に収める、時男。

朝陽を浴びながら走り去る、結城。

○都内のスタジオ

メイドっぽいコスプレをした及川タ希、ポーズを取っている。

周りには、アマチュアカメラマンたちがカメラを構えて群がっている。

その中に時男と悠介も居る。

胸の谷間を強調したセクシーなポーズに、歓声があがる。

カメラマン1「タ希ちゃん、こっち向いて!」

カメラマン2「夕希ちゃん、視線こっちにく
ださい！」

カメラマン3「夕希ちゃん、いいよ！」

笑顔でポーズをとり続ける夕希。

悠介「…夕希ちゃん、私服も良かったけど、
やっぱりコスプレ、似合うなあ！」

時男「……」

黙々と撮影する時男。

○二子玉川美術大学・演劇サークルの部室

数日後の昼休み。

時男、一眼フィルムカメラをいじってい
る。結城、入ってくる。

結城「あ、トッキー、こんにちは」

時男「……ちは」

結城、弁当箱を取り出し、机の上に広
げて、両手を合わせる。

結城「（小声で）いただきます」

遠くでスポーツをしている学生たちの
掛け声が聞こえる。

しばしの沈黙の後、

結城「あ、そのカメラ初めて見た。買った
の？」

時男「あ、うん。ネットオークションだけど」

結城「それで撮るの？」

時男「いや、本番の撮影は、5D、えっと、
デジタル一眼で。これは、個人作品用。

久しぶりに、フィルムで撮りたくて」

また、しばしの沈黙。

時男「あ、あの、結城、もし良かったら、
こいつのテスト撮影に付き合ってくれない
かな？この後、もし時間あったら」

結城「いいよ」

時男「ありがとう」

不意に部室の戸が開き、
光太、入って来る。

身構える、時男。

時男の隣に座る、光太。

結城「こんにちは」

光太「おつかれー。お、トッキー、またカメ

「買ったのかよ」

時男「ええ、まあ」

光太「何気合入れてんだよ」

時男「いや」

時男、結城を横目でちらりと見る。

結城、お弁当を食べ終えたところ。

両手を合わせて、

結城「（小声で）ごちそうさまでした」

時男「あ、じゃ、いいかな」

結城「うん、いいよ」

立ち上がって部室を出ようとする二人に、からかい半分、嫉妬半分に声を掛ける、光太。

光太「え？何、二人、そういうこと？おい！」

結城を急かすように、部室を出て行く時男。

○同・学内の緑のある場所

フィルム一眼カメラで結城の写真を撮る、時男。

結城「入学したばかりの頃も、こうやって撮ってくれてたね」

時男、構えていたカメラを下ろす。

時男「実は結城が、初めて自分から声かけてお願いしたモデル第一号だったんだ…いや、

結城が俺に声をかけてくれたお陰でお願いできただんだ」

結城「トッキーおもしろかったよね。新歓で、おしぼり取ってください、って言ったら、代わりにモデルになってくださいって」

時男「女子と話すの3年ぶりだったから、緊張してたんだ」

結城「えー！共学だったのに？」

時男「うん、だから、結城が話しかけて来てくれて、何ていうか…嬉しかった」

結城「おしぼりが？」

時男「うん」

笑い合う二人。

ふと、木の陰から子猫が顔を出す。

子猫「ニャー」

結城「可愛い。おいで」

子猫を抱き上げて頬ずりする結城。

時男、カメラのシャッターを切りながら、徐々に、寄りへ。結城に近づいて行く。

結城の笑顔のアップ。

時男、ふとカメラを下ろし、結城を見つめる。

時男「あのさ、モデル、やっぱり断ってくれないかな」

結城、驚いて子猫から時男へ視線を移す。

結城「え？」

時男「ヌードモデルなんか、断って欲しいんだ」

結城「今更そんなこと……なんで？」

時男「今こんなこと言うの、カメラマンとして失格かも知れないけど、俺、結城のこと、ただの被写体としてなんて見れない。ましてやヌードとか、無理だ……」

結城、忽ち不機嫌な表情になる。

結城「だからって、私が、じゃあやめますなんて言うと思う？今更」

突然、アイドルの歌の着信音、鳴る。

時男、スマホの画面を覗き込むと、菜々の名前が表示されている。

時男「はい、もしもし」

スマホの向こうから聞こえる、菜々の声。

菜々の声「もしもし、トッキー？結城、今何処にいるか知らない？あの子携帯持ってないからさー」

時男「あ、結城ならちょうどいい」

結城にスマホを渡す時男。

結城「え？バスロープ？うん、持ってない。うん、分かった。じゃあ今行くね」

電話を切りスマホを時男に返す、結城。

結城「私、行かないよ」

結城、子猫を抱き直す。

結城「この子、うちの子にしちゃおうかな。

二代目キティ」

子猫「ニャー」

時男「猫、好きだね」

結城「うん、大好き」

時男、再びシャッターを切る。

結城「じゃあ、また」

時男「うん、また」

子猫を抱いたまま、足早に去る、結城。

時男、その背中を見送りながら、

時男「今更何言ってるんだ、俺」

ため息をつく。

○時男の部屋（夜）

悠介、遊びに来ている。

子猫を抱いた結城の、モノクロ写真を

手にしている。

悠介「なるほどねー、この子が脱ぐのか」

時男、一眼フィルムカメラをいじりながら、

時男「脱ぐとか言うなよ」

悠介「カメラマンに徹して撮るしかないよな。

撮影会の時みたいに」

時男「アイドルだと思って？」

悠介「まあ、おまえにとってはアイドルなんだから

ろうけど、この子」

時男「その前に友達だよ」

悠介「しかし良かったな、トッキー。生身の

女の子、初めて好きになれて。俺、マジ嬉

しよ」

時男「でもいきなりヌードなんて……」

悠介「それはそれで幸せなことだよ。好きな

女のヌード撮れるなんて、カメラマン冥利

に尽きるじゃん」

時男「でも、光太先輩が……」

悠介「とりあえず、光太先輩が自慢の裸で勝

負して来るんなら、おまえは自慢の写真で

闘うしかないじゃん。その結果いい写真撮

って、賞まで獲れたら、万々歳じゃん」

時男「いや、賞とか……」

悠介「でも約束しちまったんだろ？」

時男「っていうか、無理矢理……」

悠介「つつつたって、少なくともあっちはそ

の気なんだろう？正々堂々と闘うしか、道はないじゃん」

時男「……」

悠介「いつだって俺は、お前の味方だからな」

時男、手元のカメラを撫でる。

○二子玉川美術大学・学内のスタジオ前

撮影当日。スタジオの鉄の扉には、

「関係者以外立ち入り禁止」の張り紙。

「絶対！」と赤文字が添えられている。

男子学生三人が、どうにか中を覗こう

と扉の前をうろろろしている。

男子学生1「絶対！って言われたら余計見た

くなる…一体誰が脱ぐんだ」

男子学生2「トッキーも口割らねえしな…」

男子学生3「あの劇団、そんなに可愛い子い

たっけ？」

時男が扉を開けて、出て来ようとする。

男子学生三人、閉まるドアの隙間から中

を覗こうとする。

時男、全身で三人を制する。

時男「おまえら、中見たら……、殺す！！」

男子学生1「こえ〜っ」

男子学生2「トッキーのくせにい〜」

男子学生3「行こうぜ」

三人、その場から去って行く。

○同・男子トイレ

時男、用を足している。

隣にバスローブ姿の光太が来る。

光太「さすがの俺も、ちよっと緊張してるよ」

時男「僕の方が緊張してますよ……」

光太「勝負の日、だからな」

時男「僕は、いい写真撮るだけです」

光太「約束は、約束だからな」

時男「それとこれとは……」

光太「勝負の前から負け惜しみか。まあ、せ

いぜいがんばるんだな」

時男「よろしくお願いします」

時男、先に去ろうとする。

光太「楽しみだな、いろんな意味で」
光太の表情からは、余裕が滲み出ている。

○同・学内のスタジオ

白ホリゾントの小さなスタジオ。
照明・撮影機材が並ぶ。

中央に、バスローブ姿の光太。
黒いTシャツ姿の菜々、結城の代わりにスタンドインとしてポーズを取っている。

三脚にセットされているデジタル一眼
カメラを覗き込んで調整する時男。

菜々「どう？トッキー」

時男「こっちは準備OK」

菜々「じゃあ、結城呼んでくるね」
スタジオから出て行く菜々。

○同・メイクルーム

一人、ミラーの前に座って薄い色の口
紅を引いている、バスローブ姿の結城。
メガネは掛けていない。

メイクを終え、ため息をつき、鏡の中の
自分を見る。

菜々がドアをノックする音が聞こえる。
菜々の声「結城、準備できた？」

黙っている結城。

菜々の声「結城、いるの？」

ドアを開けようとする、菜々。
鍵が掛かっている。

× × ×

(インサート)メイクルームの前。

菜々、静かに長めにノックして、

菜々「ちょっと結城、大丈夫？」

× × ×

(戻って)結城、やっとの思いで立ち
上がり、ドアの近くに行く。

結城「(か細い声で)…ごめん、もうちょっと、
待って。ちゃんと、行くから」

× × ×
(インサート)メイクルームの前。
ドアの向こうから、結城の緊張感が
伝わって来る。

菜々、ドアに顔を近づけて、
菜々「いいよ、待ってるから、準備ができた
ら、来て」

ドアの前から去る菜々。ため息をついて、
菜々「頼むよ」

○同・スタジオ

菜々、戻って来る。

時男、箱馬に座ってフィルム一眼カメ
ラをいじっている。

光太、椅子に座ってスマホを見ている。

菜々「結城、もうちょっと時間かかるみたい」

時男「了解」

光太「あれ、お姫様、直前になってビビっち
やっただ？」

× × ×

時計の秒針の音だけが聞こえる、
静かなスタジオ。時男、光太、菜々の
三人、黙って結城が現れるのを待って
いる。

光太、おもむろに立ち上がる。

光太「よし、俺、迎えに行ってくるわ」

菜々「待ってるって言ったんだけど…その方
がいいかな」

時男、戸惑いつつ、立ち上がる。

時男「あの、それなら、僕が…」

光太「同じ立場の俺の方が、説得力あるっし
よ」

菜々「うん、そうだね、光太パイセン、お願
いします」

スタジオを颯爽と出て行く、光太。

○メイクルーム

バスローブ姿でメガネなしの結城、頬杖
をついて、ミラーの前に座っている。

結城「やっぱり止めとけば良かった…」

ため息をついて、下を向く。
控え室のドアをロックする音が聞こえる。

結城「あ…はい」

光太の声「結城、開けていいか」

結城「はい、すみません」

結城、立ち上がり、ドアの鍵を開ける。

ドアを開ける光太。

無理に入ろうとせず、

光太「(さりげなく)あれ、今日はコンタクト？」

結城「え、はい」

光太「メガネより、いいよ」

結城「……」

光太「大丈夫か？」

結城「先輩は、全然平気なんですわね」

光太「俺は男だから……女の子は、簡単じゃないよな、こういうの」

結城「……怖いんです」

光太「何が？」

結城「壁を越えることが」

光太「なんで怖いのか？」

結城「たった一人で砂漠に投げ出されるような感じで……」

光太「一人じゃないぜ。俺もいるじゃん」

結城「そう……ですね」

光太、おもむろに結城の肩を抱く。

光太「大丈夫、大丈夫」

結城の頭をポンポンと撫でる、光太。

結城「大丈夫、大丈夫」

ドアをロックする音がする。

時男の声「結城？大丈夫？」

離れる二人。

結城「うん、大丈夫！」

結城、ドアを開けると、

時男が立っている。

時男「いいこと思いついた。

コンタクト、外してみたら、ちょっと楽なんじゃないかな、カメラが気にならなくなっ
て」

結城「あ、そっか！やってみる。

二人とも、ありがとうございます！」

笑顔に戻る、結城。

結城「よし！」

自信を取り戻した表情の、結城。

○同・スタジオ

菜々、椅子に座り、壁の時計を見上げながら、足をバタバタさせて焦っている。

菜々「まだかなー！時間押してる〜！」

扉を開ける音がし、バスローブ姿の

結城、現れる。

結城に続く、光太、時男。

光太「おまたせ！」

結城「待たせちゃって、ごめんなさい」

結城、菜々に向かって深々と頭を下げる。

結城の主観。

ぼやけて見える、菜々の顔。

菜々「良かった〜！じゃ早速、撮影開始！ト

ッキー、お願いね！結城はこっちで…」

視界がボケているため、よろけるように

して、菜々に続こうとする、結城。

光太、結城の手を取り、導く。

結城「すみません」

光太「大丈夫、大丈夫」

菜々「あ、そうか、ひょっとして裸眼？」

三人をポツンと遠目に見ている時男。

菜々「トッキー、何ぼーっとしてんのよ！時

間ないんだからね！！」

時男、我に帰り、カメラマンの役割に

集中する。照明のスイッチを入れたり、

三脚を調節したり。

結城、定位置まで光太に手を引かれて行くと、手を離して、ゆっくりとカメラに背を向ける。そのまま、ゆっくりとバスローブを脱いで全裸になる。

透明感のある、白い背中が、露わになる。

思わず息を飲む時男の表情。

一瞬の間の後、

菜々「じゃ、始めますか」

小道具のカサブランカの花を持って、ポーズする二人。

アートディレクターの菜々、時折モデル二人のポーズを指示したり、カメラの液晶モニターを確かめたりする。

時男、慎重に画角を決め、デジタル一眼カメラのシャッターを切って行く。

幾つかのポーズで数十枚撮ると、菜々、カメラの横に来る。

時男「どうかな」

菜々「どれどれ」

菜々に、撮れた写真を液晶モニターで再生して見せる、時男。

菜々「オッケー。いい感じ！二人も、おつかれさま!!」

時男「あ、待って」

時男、使っていたカメラを三脚ごと脇に置き、フィルム一眼カメラに持ち替える。

時男「結城、寒いのに悪いけど、もう少し付き合ってもらえないかな……」

菜々、えっという顔をするが、光太は笑みを浮かべる。

光太「そう来たか」

結城「(後ろ姿から振り向いて)顔撮らないんなら……いいよ」

時男「ありがとう」

時男、結城に近づき、ポーズの指示をする。指示に従い、背中を向けて、床に横たわる、結城。時男、床に、カサブランカの花を散らす。

結城の髪に触れ、カサブランカの花を一輪飾る、時男。

時男「ちよっとごめん……」

結城「いいよ」

振り返る結城の横顔に、赤面する時男、思わず呟く。

時男「よし、きれいだ……」

結城「ありがとう……」

手早く照明を変え、手持ちで、フィルム一眼カメラのシャッターを切る。

シャッターを切る度に、心の中で呟く時男。

時男M「好きだ、好きだ、好きだ、好きだ、好きだ……」

一心不乱に撮り続ける時男。

目に涙が滲んで来る。

白にゆっくりとフェード・アウト。

○時男のアパート・浴室（夜）

浴室に、時男が自ら作った即席の暗室。

時男、赤外線ランプの下で、写真の現像の工程を慣れた手つきでこなす。

感光した印画紙を現像液に浸す。赤い光の下、結城のヌード写真が浮かび上がって来る。

時男、結城の背中のネガをトリミングし、手で覆い焼きをして感光する。

印画紙を現像液に浸すと、結城の背中に、時男の手の影が重なっている写真が浮かび上がる。

時男、苦しそうなため息をつく。

○二子玉川美術大学・演劇サークルの部室

撮影の翌日。暗室と対照的な明るい外光が差し込んでいる。

時男、ノートパソコンで、菜々に、デジタル一眼カメラで撮った二人のヌード写真のデータを見せている。

時男「どうかかな？」

菜々「いい感じ。いい感じなんだけど……
なんか私が欲しかったトッキーらしさが出てないかな」

時男「僕らしさ？」

菜々「言われて撮らされた感があるんだよね。撮りたくて撮った感じじゃないっていうか」
時男「だって……」

菜々「ねえ、トッキーさ、この後にフィルム

で結城撮ってたじゃない？あの写真、あるんなら見せてくれない？」

時男「いいけど……」

時男、ポートフォリオケースから、

モノクロの銀塩プリントを一枚選んで、

取り出し、机の上に置く。

結城の背中 of ヌード写真。(手を重ねて

いないバージョン)

感嘆のため息をもらす、菜々。

菜々「こっちの方が断然いいよ、トッキー。」

「こっち使わせて！お願い！！」

時男「えー？！光太先輩は？」

菜々「光太パイセンには、わたしから言っとく

から！」

時男「だったら最初から……！！」

菜々「ごめんよう」

時男「(しぶしぶ) 参ったな……」

菜々「やった〜！ありがとう、おつかれちゃ

ん！！」

無理やり、時男をハグする菜々。

納得いかない表情の、時男。

○同・構内

数日後。

演劇「ラブホテル家族」の公演告知ポスターが、学内の至る所に貼られている。

ポスターには、モノクロの結城の背中 of ヌード写真と、「ニコ美史上初、R指定エロティック・コメディ演劇?!」のシヨッキングピンクの「ピー」がデザインされている。

撮影当日に扉の前で中を覗こうとしていた男子学生三人、掲示板に貼られたポスターを、食い入るように見ている。

男子学生1「で、誰なんだ！」

男子学生2「いい尻してんなあ！」

男子学生3「見えそっで見えないところがいー！」

三人「せーの！」

三枚並べて貼られたポスターを各々一枚ずつ同時に剥がし、走り去って行く、三人の背中。

○同・教室

学園祭公演に向けての、演劇の稽古。練習風景をカメラにおさめる時男、ヒロイン役の結城、演出兼ヒロインの恋人役の光太の他、十数名の部員たちが稽古している様子が見える。結城、額に汗を滲ませながら、練習に励んでいる。光太に厳しく怒鳴られながら、何度もやり直す、結城。

× × ×

月日が過ぎる。

日々の稽古に明け暮れる部員たち。バツの付いたカレンダーや、アルバイトする時男や光太、飼い猫に餌を与える結城など、日常のシーンのモニターシュを舞台の稽古風景にインサートし、時間経過を表現。

○同・校門付近

数週間後の学園祭当日。

「ラブホテル家族」のポスターが目立つ構内。

部員たち、ポスターと同じデザインのチラシを配っている。

チラシを覗き込んで話題にしている女子学生や、顔をしかめる父兄など。

○同・学内の劇場前の通路

「ラブホテル家族」の公演告知ポスターが貼られ、「劇団 ラブ&ピース」の看板が掲げられた入り口から、長蛇の列が伸びている。老若の男性客の他、若い女性客のグループも意外に多い。

○同・学内の劇場

「ラブホテル家族」公演の真っ最中。

一家団欒シーン。父役、母役、弟役の演者が、ダイニングテーブルを囲んでいる。

舞台中央に立つ、セーラー服にメガネ姿の結城に、スポットライトが当たっている。

結城、真剣な表情で、

結城「それでもあの人が好きなの。

相手がAV男優だからって、恋しちゃう

けない決まりはないよね？

それにうちだって！

そう、わたしの実家は……」

テーブルを振り返る結城。

照明がピンクに変わる。

家族「ラブホテル！」

観客席から笑いが起こる。

記録係の時男、舞台に立つ結城にカメラを向け、シャッターを切り続ける。

× × ×

舞台は、クライマックスを迎える。

セーラー服にウエディングベール姿の

結城と、蝶ネクタイに赤いトランクス

姿のAV男優役の光太が抱き合うシー

ン。シャッターを切る、時男。

エンディング。拍手。

カーテンコールで、十名程の出演者が

出てくる。中央に、結城。

シャッターを切り続ける、時男。

○同・演劇サークルの部室（夜）

時男、結城、光太、菜々を含む十数名の部員、反省会をしている。

光太、缶ビールを手に、

光太「一日目、無事に終了しました！

菜々のポスターのおかげで、客の入りも上々、
まずまずのスタートとなりました！！

俺も、ポスターではボツ喰らいましたが、舞
台で脱げて、感無量です！

ヒロインの結城にも感謝。

ほんと、ありがとう。

そして、みんな、ありがとう、乾杯！！」
全員、乾杯する。

机の上には、缶ビールやコンビニのおつまみが並んでいる。

時男はペットボトルのお茶、他の部員たち大半は、缶ビールを飲んでいる。

結城、メガネをかけていない。

少し垢抜けて女っぽくなった雰囲気。

チューハイで酔って、頬が赤い。

菜々「結城、いっこ壁越えたね」

結城「そかな」

菜々「越えた、越えた」

結城「自信持っていいかな」

菜々「うんうん」

そんな二人のやり取りを見つめる時男。

光太「そうだ、トッキー、俺のボツ写真、くれ

よな。これでもがんばったんだぜ」

時男「あ、すみませんでした」

菜々「トッキーが悪いわけじゃないのよ。

ただ、トッキーが後で撮った写真の方が数

十倍、いや、数百倍良かっただけなのよ」

光太「（意味ありげに）ふーん」

光太、立ち上がる。

光太「じゃ、俺、そろそろ帰るわ。明日もあるし。それに」

時男の方を向く、光太。

光太、部室のロッカーに貼られた、学

内写真コンペの作品募集チラシを顎で

指す。

光太「明日はコンペの結果発表もあるしな」

菜々「光太パイセン、どんな写真出したの

〜？」

光太「見てのお楽しみ」

光太、思わせぶりに結城に視線を送る。

恥ずかしそうに俯いている、結城。

菜々「トッキーはあの写真出したんでしょ？」

時男「うん、まあ、ちょっとアレンジして」

光太「いろいろと楽しみだな。じゃ」

出て行く光太。菜々と他の部員たちも、
続いて出て行く。

菜々「おつかれ〜」

結城、帰ろうとする。

時男「あの、結城！」

結城「？」

時男「あのさ、これ」

時男、写真展のDMを、結城に渡す。

結城、DMを見て、

結城「あ、例の。行くよ、もちろん」

時男「俺も、応募しただけでまだ見れてない

んだけど」

結城「明日、発表なの？」

時男「うん。良かったら、見に来て。明日の

公演後には、結果出てるから」

結城「分かった、ありがとう」

時男「こちらこそ、ほんと、ありがとう」

結城「うん、明日ね。じゃあ」

部室に一人、残される、時男。

○同・学内のギャラリー

翌日の公演後。

ギャラリーに足を踏み入れる、結城。

メガネは掛けていない。

前より更に洗練された印象。

受賞作品のキャプションには、賞のタイトルが記されたりボンが貼られている。

結城、ギャラリーの奥に、ふと時男の姿を見つけ歩み寄る。

時男の観ている作品を目にして、さっと凍りついたような表情に変わる。

結城「なんで……?!」

言葉が続かない、結城。

朝の光に照らされた、裸の女性が後ろ向きでベッドに寝ている、モノクロ写真。

結城と同じ背中。女性の手前には、

結城の子猫が居る。

タイトルは、

「猫のいる風景 三年 五十嵐光太」とあり、最優秀賞のリボンが貼られている。

時男、写真を凝視している。

時男「……」

時男、結城に気づく。

時男「結城……」

結城「トッキー……」

時男「……」

結城「ごめん」

時男「謝らないで……」

結城「ごめんね……」

時男「謝らないですよ！」

結城「あ……」

光太の作品の隣に、時男の作品を見つ
ける、結城。

リボンが貼られていない時男の作品、
二点。

一つは、「無題」というタイトルの、
結城の背中の中のモノクロのヌード写真。

時男の手の影が重なっている。

触れることのない背中。

もう一つは、「大好き」というタイト
ルの、子猫を抱く結城のモノクロ写真。

結城「……大好き」

ギャラリーのライトが消え真っ暗になる。

時男M「大好き」

○「焼肉☆NICO」・店内（夜）

忙しそうに働く、時男。

時男M「勝負は、最悪の後味で幕を閉じ、僕
はその現実から逃れるかのように、日常の
ルーティンに身を任せた」

○都内のスタジオ

及川夕希の水着撮影会で撮影に集中
する、時男と悠介。

時男M「興味の対象は、また、永遠にお近づ
きになることのないアイドルへと戻り、バ
ーチャルに没頭することで、僕は、絶望の
冬をやり過ごした」

○井の頭恩賜公園

井の頭池沿いの遊歩道を、ママチャリを走らせる、時男。

手をつないであちらからやって来る、結城と光太のカップルと、すれ違う。

デートに夢中な余り、時男に気付かない二人、後ろに遠ざかる。

時男M「それでも、地球は回り続ける」

○御茶ノ水駅

カメラを肩に下げ、中央線のホームに立つ、時男と悠介。

秋葉原での撮影会の帰り。

自販機から缶コーヒー二本を取り出し、時男に一本を投げて渡す悠介。

悠介「ほら」

時男「さんきゅ」

並んで、缶コーヒーを飲む二人。

悠介「おまえ絶望とか言ってるけどさ、意外と幸せだと、俺は思うけどな」

時男「そうか？失恋したのに」

悠介「幸せだよ」

時男「そうかな」

ホームに電車が入ってくる。

時男、乗り込む。

悠介、ホームでピースをする。

悠介「最高に幸せだよ、おまえ」

ドアが閉まり、時男、ピースを返す。

電車、発車する。

遠ざかる、悠介。小さくなる。

フェードアウト。

○都内のハウススタジオ

T【十年後】

ベッドルーム風のスタジオ。

スタジオ内には、グラビア誌の雑誌編

集者、カメラアシスタントなど、数人のスタッフの姿がある。

アシスタント「及川タ希さん、入られまーす」

28歳になったタ希、スタイリスト、ヘアメイク、マネージャーなどと共に、ス

タジオに入ってきて来る。

スタッフたち「よろしくお願ひします」

時男「よろしくお願ひします」

一人前のフォトグラファーになった

時男、挨拶する。

祐希「今日もよろしくお願ひします！素敵に

撮ってね、トッキー」

カメラを構える時男。

ベッドで、ポーズを取る、夕希。

相変わらず、セクシーな胸元。

時男「いいですね、いいですね、次、笑顔で、

はい、最高です！」

嬉しそうに微笑む、夕希。

セッションが続く。

○書店の店頭

結城、通りかかる。

洗練されたメガネ女子といった印象。

あるグラビア誌の表紙に目を止める。

及川夕希が、表紙を飾っている。

結城、雑誌を手に取り、中を少し確認

し、ハツとした表情を浮かべる。

及川夕希のページに、

「撮影／星野時男」の名前があった。

○ギャラリー

別日。

ギャラリーの前の看板に、

「星野時男写真展『NUDE』」

とある。

メガネ女子結城、ギャラリーに入って

行く。数人の客がいる。

モノクロのヌード写真が並ぶ。

一枚一枚に見入る、結城。

モデルは、及川夕希だった。

愕然とした表情の、結城。

時男「結城？」

結城、振り返る。

時男が立っている。

相変わらず、黒白のボーダーシャツに、

メガネ姿。

結城「トッキー」

時男「久しぶり」

結城「個展なんて、すごいね。おめでとう」

時男「ありがとう」

結城「モデル、びっくりしちゃった、すごいね」

時男「特別に、お願いしたんだ。いろいろ大変だったけど、結果、事務所にも好評で、

写真集の話も持ち上がったて」

結城「すごいね、がんばったね」

時男「結城のおかげだよ」

結城「わたしは……」

時男「ありがとう」

結城「そんな……」

時男「ありがとう、結城」

時男、右手を差し出す。

恥ずかしそうに、握手する結城。

結城「トッキー……」

ギャラリーに、及川夕希が入って来る。

咄嗟に手を離す、時男と結城。

夕希「ごめん、遅くなっちゃって」

時男「大丈夫。あ、結城、こちら……」

結城「こんにちは、初めまして」

夕希「あ、あなたが」

時男「あ、そうなんだ、結城泉さん」

夕希「婚約者の及川夕希です」

結城「……婚約！」

時男「ごめん、びっくりさせて。先日そういうこと」

夕希「そういうことって何よ。そういうことってートッキーだったら」

時男「（照れまくって）ははは」

結城「すごい、トッキー。夢がどんどん実現して行くね」

時男「10年以上かかったけどね、まだまだ」

結城「おめでとう」

時男「ありがとう。これからオープンングパーティーなんだけど、結城も参加して行かない？」

「？」

結城「あ、ごめん。今日は用事があった……」

時男「そうか。じゃあまた」

結城「また」

夕希「また遊びにいらしてくださいね」

足早にその場を去る、結城。

時男M「それ以降、結城には会っていない」

○結婚式場

カメラマンを務める悠介、集合写真を撮ろうとしている。

中央に、新郎時男と新婦及川夕希。

菜々や光太など、結城以外の大学時代の友人らの姿がある。

悠介「はい、撮りまーす、みんな一緒に、はい、又ード！」

笑い転げる客たち。

照れる二人。

集合写真、そのまま、写真フレームに。

○時男と夕希の新居・リビング

棚の上に飾られた、結婚式の時の集合写真。二人だけの写真もある。

新婚カップルの部屋らしく、初々しい

ピンクと白を基調としたインテリア。

夕希の趣味でまとめられている。

悠介が遊びに来ている。

夕希は不在である。

トイレから戻って来た、悠介。

悠介「トッキー、あの写真」

時男「トイレの？」

悠介「あのときのだろ」

× × × ×

(フラッシュ)(トイレの壁に掛けてある、写真のアップ。

結城の背中の中又ード写真である。

× × × ×

時男「原点だから、俺の」

悠介「おまえはほんとに幸せモノだよな」

時男「おまえ前からそう言ってるけど、幸せって思えたの、ここ最近だけ」

悠介「おまえ、ほんと幸せモノだわ」

時男「今が一番いい時だとは思ってるけど」

悠介「あゝ俺も幸せになりたい」

夕希、リビングに入って来る。

夕希「今が一番、ってどういう意味？」

時男「あ、夕希、おかえり」

悠介「お邪魔してまゝす」

夕希「こんにちは。あら、お茶もお出ししてないの？」

時男「あ、ごめん」

夕希「はい、手紙。あなたの結城さんから」

夕希の手に、ピンクの封筒。

時男「ごめん」

夕希「謝らないで」

悠介「喧嘩はやめて〜」

夕希「喧嘩じゃない！」

時男、悠介「ごめんなさい」

夕希「謝るな！」

○同・時男の仕事部屋（夜）

美大時代とインテリアの趣味が変わって
いない、カメラオタクっぽい部屋。

機材や本がグレードアップしている。

時男、結城からの封筒を見つめる。

英語で住所が書かれている。

手紙を封筒から取り出し、読み始める、
時男。

時男M「星野時男様……」

○成田空港

旅支度の結城、出国ロビーをスツケ
ース片手に歩いている。搭乗手続きを
する。

飛行機、飛んで行く。

結城M「星野時男様

その後、お元気ですか？

この度は、ご結婚おめでとう。

写真家になる以上の夢を、叶えたね。

本当に、おめでとう。」

○上空（夜）

空に、結城の大学時代の友人たちの顔が浮かぶ。時男、光太、菜々、子猫、演劇部員たち。

結城M「わたしはと言えば、あのととき、トッキーのおかげでひとつ大きな壁を越えることができたけど、人生には幾つも壁があって……。ひとりじゃなかなか難しいですね。」

○機内（夜明け）

空から、飛行機の内部へ。
外を見つめる結城のアップ。
太陽の光が差し込んで来る。
窓の外には、壮大な日の出の光景が、広がっている。

朝陽を見つめる、結城。

結城M「でも、この間、トッキーの作品を見て、思ったの。越えられない壁はなくて、たとえ時間が掛かっても、いつか越えられるから、壁はあるんだよね。トッキーも、10年掛けて、ひとつ、壁を越えたんだね。わたしも、また、もうひとつの壁を、越えようと思います。

今後の活躍を、心から応援しています。これからも、写真、楽しみにしてるね。元気だね。

結城「

結城の瞳に、朝陽が映り込む。

○多摩川沿い（早朝）

ママチャリを止める、時男。
カメラを肩に下げている。
時男、土手の上から、朝陽をカメラに収めようとする。
時男の主観。ショキング姿の結城、ファインダーにフレームインして来る。

結城、朝陽をバックに、カメラに向かって、満面の笑みを浮かべながら、

結城 「よし、スタート！」

時男 「よし、スタート！」

シャッター音とともに、画面、結城の背中のヌード写真へ。

タイトル『SHUTTER♥LOVE』
エンドロール。
了